

調されたように思うが、たとえば林冠植物と林床植物の分布のちがいを説明する温度差のデータがあるか。種ごとのずれがあるのに、温度線をはっきり引いてしまうのも、植生図をかくのと同様、無理ではないか。たとえば沼田氏はネパールの草本と本木の分布のずれを述べている。

○ 種ごとに湿度適合はいろいろ異なるので、マクロにみるのかマイクロにみるかの視点が必要である。

◎ 分布要因として何が最も制限要因としてきているのかを見極めることが肝要である。

(抄録 清水建美)

【夏季例会採集会報告】

釜無溪谷の植物

今井 建樹

昭和50年7月5、6日の両日、植物研究会の採集会が諏訪郡富士見町釜無溪谷で行なわれた。参加者は奥原、清沢、山越、保坂、阿部、森山、加々見、今井の諸氏であった。

昨年9月下旬に同地で採集会が行なわれたが、その際多数の希品、新産地の確認が行なわれ、季節を変えてもう一度行きたいとの要望があり、夏季採集会開催の運びとなったわけである。

この地は赤石山脈の北端にあたり、いわゆる赤石楔状地の先端部である。地質は地域によって異なるが、その多くは石灰岩や古生層、中生層などによって占められている。また釜無川はその本流に直交する多くの支流とともに著しい侵食をおこし、各所に断崖をつくり、地質的にも複雑であるため多様な自然環境を具備している。植物区系的に見るとフォッサ・マグナ地区に属し、一方釜無川は関東地域、表日本地域等の植物の当地方への有力な侵入口であると考えられる。これらの要素があいまって豊富な植物相を形成している。

5日：標高凡そ1,200mの釜無川支流の白谷溪谷で調査。ここはフサザクラ、クマンシ、ダンコウバイ、オニグルミ、バッコヤナギ等を主とする落葉広葉樹林帯で下部は比較的暗く湿潤であった。ここで見られた主なものは、クサコアカソ、クマノミズキ、ギンバイソウ、ケナシオニシモツケ、ツルデンダ、クモノスダ、ヒメウツギ、スグリ、ヌリワラビ、オオヒメワラビ、ハナチダケサシ、コイワザクラ、チチブシロガネソウ、セキアノアキチョウジ、ミヤマアキノノゲシ、トチバニンジン、ナットウダイ、チョウセンナニワズ、ホテイアツモリソウ、ナンブクロカンバ、ホソバツルリンドウ、ヒメヤシヤブシ、イワウサギシダ、レンゲショウマ等でフォッサマグナ要素といわれているもの、好石灰岩性のもの等が多く見られた。

6日：天候に恵まれず大雨である。折角来たからということで採集に出かける。釜無川の本流を登って支流の白川と前小沢との中間点、標高凡そ1,050m地点で調査。岩場のあちこちにイチウシダが見られる。落葉広葉樹帯に入りそこではミヤマクマヤナギ、ハクウンボク、ホソエウリハダ、マルバアオダモ、メグスリノキ、ヤマボウシ、イヌブナ、チョウジザクラ、オオヤマザクラ、

などが見られた。その中に、ウラジロモミ、ハリモミ、コメツガ、ヒメマツハダ、ネズミサシ等の針葉樹がわずかに混生しているのを見る。草本として、ナガバノコウヤボウキ、オオバシヨウマ、ミヤマアキノノゲシ、イチヤクソウ、ヤマシキヤク、ミヤマハダザオ、イワハダザオ、ウメガサソウ、低木としてミツバツツジ、ハヤザサヒョウタンボク、ツクバグミ、オトコヨウゾメ（極めて小葉のもの）、クロカンパ等であった。

そのあと山梨県白州町大武川の溪流をさか登り、ナツツバキの採集に行く。途中の溪流の岩場にイワタバコを見ることができた。帰途富士見町上萬木の三光寺により、諏訪地方ではこの附近しか見られない、ウランマソウを見る。天候には恵まれなかったが有意義な採集会であった。

【秋季合宿調査報告】

米子谷の植物を追って

和田 清

昭和50年9月6日～7日の両日、植物研究会の採集会が須坂市東方、米子川流域を主として行われた。参加された会員は、伊藤、奥原、北村(英)、清水(剛)、堤、堀米、望月、山越、山崎(惇)の各氏と幹事の和田の他、非会員の長谷川、足達、横山、真岡、丸山、浜中の学生諸君であった。

9月に入ると例年なら秋雨の季節。雨を覚悟の例会ではあったが、連日の残暑が続き、しかも、車へ乗った途端に激しい夕立となるという、まことに恵まれた2日間であった。しかし、さすがに9月ともなると、深山の緑に初秋を思わせる風情の中で、かつての菅平、角間川溪谷採集会に次いで3回目の上信国境(上信火山帯)の採集会は有意義に進められた。裏日本と表日本要素の接点になると期待されてきた奥原氏、ミヤマニガウリが出る度に歩を止めては熱心に説明される堀米氏、もしやヒメスミレサイレンでは(後日、奥原氏の同定によりミヤマスミレの大形品)とかがみこん観察される望月氏、どここの採集会へも参加をと意気込まれる北村氏、コウモリソウ属に目を光らす伊藤氏、シダ類に焦点をしばって参加という清水氏、ササ類を黙々と調べ歩く堤氏、奥原先生の年令ならまだ負けまいと張切る山越氏、佐久の植物との共通点を追う山崎氏等それぞれ目的をもった参加であった。

9月6日(第1日め)、仙仁温泉より大笹街道沿いに仙人山ノ神往復。須坂一菅平線も既に補装され、山歩き足には何とも歩きにくい。所々にシラカンバを混じえたコナラ等の二次林やヤシヤブレ、フサザクラ、ケヤマハンノキなどからなる河畔林は見られるが、ほとんどは植林域。谷の湿潤地にはスギがよく成長し、残存木から見ても潜在自然植生は、ケヤキ林域であることがうかがえる。山腹から尾根筋にはカラマツが広く植林されている。一般にこの地方は、低海拔地は個人の持ち山(スギ植林が主)、上部は財産区有林(カラマツ植林)で、植林がよく行き届いている。初日は、車道沿線のため目新しい種は出てこなかったが、(ケナシ)ヤブデマリ、赤い実やハギ(ヤマハギ)、オトコエシ、ナンブアザミ等、秋の訪れを感じさせる半日であった。宿では、岩窟風呂と